

すべての人のための病院

特定非営利活動法人 ジャパンハート
プロジェクトダイレクター
長谷川彩未

地域の人が信頼しない病院

カンボジアの首都、プノンペン。この地最大の国立病院を舞台に起きた悲劇を、私は目の当たりにした。

病院に到着したものの治療が受けられず、玄関先で人が亡くなってしまう。お金によって命が左右される現実だった。

あれから7年。発展していくプノンペンの街並みとは裏腹に、貧困層の前に立ちふさがり医療格差の問題はますます深刻化している。

国連は「ユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）すべての人が、適切な健康増進、予防、治療、機能回復に関するサービスを、支払い可能な費用で受けられること」という概念を提唱したが、この国での実現にはまだ時間が必要だろう。

現在、カンボジアでは、年間約21万人が医療渡航者として海外で治療を受けている。行き先は、隣国のベトナムを筆頭に、タイやシンガポールなどだ。こういった行動を取るのはいくつかの富裕層だが、この国では貧困層の中にも陸路で

渡れるベトナムまで行って治療を受ける人たちがいる。

1970年代から約20年続いた内戦の影響から、カンボジアでは特に医療、教育、法律の領域で整備が行き届いていないものが多い。それに加えて、医師や看護師を含む国家公務員の給与が少ないことも、医療環境の改善が進まない原因の一つとなっている。彼らは生計を立てるため、兼業していることも少なくないのだ。

午後になると、アルバイトをするため、病院から医師や看護師などの医療従事者がいなくなる。治療が受けられないので、それまで来ていた患者も次第に来なくなり、医療従事者は技術を身につけることができなくなってしまふ。すると今度は「治療しても治らない」ということになり、患者がさらに少なくなる。カンボジアの病院は、こうした悪循環から抜け出せずにいた。

「日本」というブランドの力

私たちは、このような問題を抱える地方の病院に間借りし、貧困層に対する医療活動を実施している。

7年間の活動の中で、私が経験した面白い変

化があるので、ぜひ紹介したい。

最初は患者が訪れず、閑散としていた地元のある病院。ところが、日本の医療団体の支援がきっかけとなり、徐々に患者が集まるようになった。

この国では、医療従事者の給与は分配制なので、患者の増加はそのまま医療従事者の給料の増加を意味する。本業で生計を立てられるようになった医療従事者は、無理にアルバイトをしなくても済むので、一日中病院にとどまるようになる。おかげで患者はいっ病院に行っても診察を受けられるようになり、来院患者の増加に伴って医療従事者の診療技術も向上したのだ。

私たちが支援する他の三つの病院でも同じような傾向が生まれ始めており、私たち日本人スタッフが存在する時も来院患者数の大幅な減少は起きていない。

これは、日本のブランド力によって患者の流れを生み出し、現地の医療機関が本来の機能を



田舎をまわり、無償で医療を提供する診療活動では、毎回多くの住民が医療を求めてジャパンハートの元を訪れる



カンボジアの子どもたちが安心して病院に通える社会—それが今の目標だ(右が筆者)

<Profile>

はせがわ・あやみ
学生時代に訪れたマレーシアの病院で、医療へのアクセスが限られた現地の人々を目にして海外でのボランティア活動を決意。2006年から国際医療ボランティア団体「ジャパンハート」の研修に参加。2008年、同団体に入職。医療活動のほか、カンボジア事業の立ち上げ、国際緊急救援の指揮など、幅広く活躍。

取り戻して継続的で社会的なメリットを生み出した、一つの事例となった。

この経験から私は「日本ブランド」という新たな可能性を見つめ直し、どのように開発途上国の医療の発展に生かすべきか、模索する日々を歩み出した。

医療のモデルケースをつくる

今、カンボジアではあらゆる業界で、若い世代の目標となる職業のモデルケースがあまりに少ないという問題を抱えている。これは医療分野でも言えることで、その主な原因は、病院の第一線で働く医療従事者のレベルが低いことにある。

そこで私は、医療分野のモデルケースを現地の人と一緒に作り上げることを目指し、同国に貧困層向けの病院を建設する計画を開始した。この病院は現地の医療従事者の人材育成に向けた中心的施設として、地方病院の人材に継続的に研修の機会を提供する。それと同時に、日本人ボランティアにもこの病院に参加してもらい、両国の協力を活性化させる。

今、実現に向けて現地保健省と調整中だ。

未来の医療従事者を育てる

病院建設と並行して手掛けているのが、カンボジアの未来の医療従事者への支援だ。このプロジェクトは、学力は優秀だが経済的理

由で進学を諦めざるを得ないカンボジアの地方出身の高校3年生を対象に、医師・看護師免許取得までの歩みをサポートするというもの。

彼らは日本の里親の支援を受けて、日本人ボランティアと共同生活をし、医療従事者養成校に通学しながら地方での医療活動を手伝う。卒業後は私たちの病院で研修を受ける。将来的には、カンボジア社会を越えて国際的な舞台で活躍できる優秀な医療従事者の輩出が目標だ。

医師の誕生には10年、看護師でも6年という長い月日がかかる。それを考えると、結局、大きな変化は地道な作業の中からしか生まれてこない。

これからも心の声に耳を傾けながら、自分に正直に歩んでいきたい。



手術はジャパンハートの日本人スタッフと現地病院スタッフとの協働で行われる



日本の医療団体の活動は、現地住民と病院双方にとって大きな発展を生み出している